

令和4年度坂部小学校学校経営構想

I 歴史と伝統

明治5年(1872年)「学制」の発布を受け、翌6年(1873年)7月16日、坂部村久翁寺に青池学校分校「中里村学校」が設立された。これが本校の始まり(創立)である。そして、明治26年(1893年)1月31日、現在の場所に坂部尋常小学校校舎を新築し、本校開校となった。(令和5年(2023年)1月で開校130周年となる)地域の人々は、人材の育成を重んじ、教育に深い理解を示し続けている。それを象徴するのが、大正8年(1919年)10月に制定され、以来百年余にわたり歌い継がれてきた校歌である。本校校歌は、まだ学校に校歌がなかった時代に先んじて作られた。「熱心 勤勉 質朴を 村是としたるわが村の」「おしえのさとし 身にしめて」「いざや励まん 文の道」という歌詞には、当時の人々の思いとともに、先進性と教育にかける情熱が込められている。

平成4年(1992年)、坂部工業団地が本格的に操業を始め、平成21年(2009年)には富士山静岡空港が開港した。各所に工場や事務所が作られ、道路整備とともに地元企業に勤める人が多くなり、交通量も増加してきた。農家には、茶・みかん・米・レタスに加え、新たな商品作物を栽培しようとする機運があり、地域全体で情熱と誇りを持って農業の活性化に取り組んでいる。豊かな自然や進取と堅実な地域風土の中で、学校を支える基盤としての地域の存在は、確固としたものがある。

本校教育に脈々と流れる精神は、校歌にある村是「熱心 勤勉 質朴」の心の他、校章に込められた「勉学 気品 有為」の心、39年間続いている「仲よし学校」の「感謝 思いやり がまん」の精神に表れている。これらを坂部小学校の教育の礎とし、代々受け継がれてきた伝統を大切にするとともに教育の動向を鑑みながら、更に創造発展させて未来につなげていきたい。(令和2、3年度の「仲よし学校」は、新型コロナウイルス感染拡大防止の対応として「仲よしウォーキング(R2.11.21とR3.11.20)」に変更した)

II 坂部の実態

1 地域の実態

- ・坂部区には約800世帯が居を構え、1町内から6町内に分かれている。町内によっては、児童数の減少がみられる。
- ・3世代家族が多い。
- ・地域の方々は、学校への協力をおしまない。

2 児童の実態

- ・素直で明るく、何事にも真面目に取り組むことができる。
- ・学年間の枠をこえた強いつながりがある。
- ・困っている人がいると優しく声を掛けたり手をさしのべたりできる。
- ・「人が好き」「学校が好き」「坂部が好き」な子が多く、それぞれを大切にしている。
- ・坂部しぐさ「くつそろえ」「傘閉じ」がよくできる。
- ・やることが明確になれば一生懸命に取り組めるが、主体的に取り組んだり、粘り強く最後まで考えたり、試行錯誤しながら課題解決したりすることの苦手な子が多い。
- ・相手の考えを反応しながら最後まで聞いたり、それを受け入れ自分の考えを深めた

- り、相手を意識して自分の考えを堂々と表現したりすることの苦手な子が多い。
・学習の基礎・基本の定着の不十分な子がいる。

Ⅲ 令和4年度教育課題

- 1 様々な特性を持った子への個に応じた柔軟な対応と心のこもった関わり（特別支援教育の充実）
- 2 「主体的・対話的で深い学び」を目指した授業実践による授業力の向上とそれを支える基礎・基本の定着
- 3 「次代を切り拓く力」を育むためのキャリア教育を軸とした榛原中学校区内小中一貫教育の推進（9年間で子供を育てる意識の共有化、令和12年度の学校再編を見据えて）
- 4 地域と学校がともに笑顔になるコミュニティ・スクールの推進で、学校に活力を生み出す
- 5 1人1台端末を活用した授業実践（ギガスクール構想の具現化）
- 6 子供と職員、そしてその家族の安心・安全な生活を第一と考えた新型コロナウイルス感染症等の防止対応

Ⅳ 経営理念

- 1 全職員が全校児童の担任
小規模校である本校の強みを生かし、「支援員等を含めた全職員が全校児童の担任である」という意識を持って情報共有を行うとともに、支援・指導にあたる。
- 2 組織で動く
職員一人一人の持ち味を生かして全教育活動に取り組むことはもちろんであるが、更によりよいものを創るため、共通して支援・指導にあたる部分については、「組織（教務部、授業づくり部、心と体そだて部、事務部等）で動く」ことに努める。そして、一枚岩になることで学校全体が同方向を向き、より安定した学校経営を行っていく。
- 3 目指す姿（育てたい資質・能力とその具体的な姿）を明確にする
目標（何のためにそれをやり、どのような具体的な姿を目指すのか）を明確にし、自分の思いを伝えるとともに、対話を重視しお互いの気持ちを理解し合うことで、より強い組織づくりを目指す。

Ⅴ 目指す学校像とその主な手立て

- 1 一人一人の「よさ」や「違い」を認めるとともに、人権意識を持ちながら活動することで、誰もが勇んで（心が奮い立つ、力がわいてはりきる）向かいたくなる安心・安全な学校を目指します。
(そのために)
まずは、自分自身が健康である
自分を理解してくれる優しさと厳しさを持った友達・学級、先生がいる（安心感）
何でも話せる先生がいる（ほめる、支える・相談にのる、温かな指導）
楽しい授業がある、授業の中に新たな発見がある

授業が分かる（基礎・基本の定着）

ワクワクする活動や行事がある

家庭が学校の理解者である（家庭・地域も子供を安心して送り出せる）

→児童理解と個に応じた支援の充実【VII-2】

→危機管理意識を高める【VII-3】

2 「学校教育の中心は『授業』である」という基本理念のもと、授業の中でも子供が輝く学校を目指します。

→学習指導要領の趣旨を踏まえた授業実践と研修の充実【VII-1】

→「授業が楽しい」「授業が分かる」から基礎・基本の定着に結びつく取組【VII-1】

3 地域とともに歩み、地域とともにある学校を目指します。

→地域人材の活用、コミュニティ・スクールの推進【VII-4】

VI 学校教育目標、育てたい資質・能力、重点目標

1 学校教育目標 「心豊かで たくましい坂部の子」

< 心豊か > ・自らを律しつつ、相手と協調し、相手を思いやることができる
・真理を追究し、美しいものに感動する

< たくましい > ・自ら考え、最後までやり抜き、自分の言動に責任を持つ
・より高い価値をめざして挑戦する
・何事にも柔軟に対応し、困難に負けないしなやかさを持つ

2 育てたい資質・能力（参考：牧之原市学校再編計画）

牧之原市で育てたい資質・能力は、「次代を切り拓く力（社会がどのように変化しても生き抜くことができる人間力と、新しい価値観や新しいことを創造する力を併せ持ったもの）」である。具体的には以下の七つとなる。これからの小中一貫教育を踏まえ、本校における「育てたい資質・能力」を本市とあわせた。

(1) 生きる力の基礎・基本（心身のたくましさ、自己肯定感や命の大切さなど、人が生きていく上で大切な部分：坂部しぐさ 等）

(2) 基礎的な知識・技能（学校などで学ぶ知識や技能のことであり、考え、行動する上での基礎・基本となる力）

(3) 多様性を受容する力（自分自身を知り、他者（社会）には様々な価値観や文化、背景、立場があることを理解し、受け入れることができる力：思いやり 等）

(4) 課題発見・解決力（疑問を持ち、自分で考え、他者と協働して、解決に向けて行動したり、新たな価値を生み出したりすることができる力）

(5) コミュニケーション力（相互に思いや考えを伝え合い、聴き合い、共感しながらよりよい関係を築く力）

(6) 活用力（自分が学習したことや得た情報等を、実生活や自分の将来に活かすことができる力）

(7) 創り出す力（新しい考えやアイデアを創り出し、主体的に実行する力）

これらの育てたい資質・能力を教科等横断的な視点で育ていけるように、組織的に配列しながら教育課程を編成する。

<参考：主体性と自主性>

主体性とは、「何をやるかは決まっていなくても、自分の意志や判断で責任を持って行動する態度」である。例えば、あいさつをしようとする人が、「職場環境をよくする目的」から、あいさつ以外に朝礼を企画するなどの行動を起こす人。

これに対して自主性とは、「明確に定まっていることを、人に言われる前に率先して自らやる態度」である。例えば、あいさつをする際に、周りの人に率先して元気よくあいさつすることができる人。

3 重点目標 「夢中になって ともに取り組む子」

令和元年度までは、自己肯定感を高めるために「自己のよさ」に視点をあて、よさ見つけや称揚といった教育活動を進めてきた。そして、令和元年度からは、本校児童の課題である「主体性」を身に付けさせたいという願いから、重点目標を「夢中になって取り組む子」とした。物事に「夢中」になって取り組むことで、更に次への主体的な態度につなげたいと考えたからである。実際に授業では、「夢中」になって取り組ませるための手立てとして、子供から出された問いを学習問題として提示することで意欲につなげた。また、行事等では、子供の実態や思いから「夢中」になるための支援の工夫に努めた。これにより、様々な場面で子供たちの「夢中」の姿が見られるようになり、それが自主性へとつながった。しかし、学校評価結果や児童の実態を見たとき、「Ⅱ 児童の実態」に示したような課題が明らかとなった。

そこで、本年度の重点目標を「夢中になって ともに取り組む子」とした。これまで同様、「夢中」になって取り組むことで自主的な姿から主体的な姿へと高めていきたいと考えた。また、これまでの重点目標が個に視点を当てたものであったのに対して他者を巻き込んだ生きる力を育むための「夢中」でありたいという願いから「ともに」を加えた。個が夢中になって取り組み、そこから他者に関わり集団としてともに夢中になることで、自己の成長から集団としての成長へとつなげたいと考えたからである。個だけでなく集団としてより大きく「夢中の姿」を捉える視点を重点目標に明記することで、着実に「次代を切り拓く力」の育成につなげたい。

令和3年度の課題として、「子供たちの『夢中』の姿が明確でなかった＝目指す子供の姿が教職員にイメージできていなかった」ことが挙げられた。今年度は、個や集団の「夢中」の姿やそのための手立てをより具体的に示すことで、確実な成長へと結びつけていく。

Ⅶ 経営の重点

1 学ぶことを楽しいと感じ、自ら追究しようとする力を育てる。(知)

○「学校教育の中心は『授業』である」という基本理念のもと、教材研究を通して魅力ある授業づくりに努めるとともに、「聞く（反応する）、考える、話す」を更に意識した授業を構想する。(研修の充実)

- ・子供が主体となる学習（自分ごととしての学び）の創造
- ・学習指導要領を踏まえ「主体的・対話的で深い学び」を目指した授業づくり（「令和の日本型学校教育」の構築を目指した「個別最適な学び」と「協働的な学び」

の実現)

- ・1人1台端末を取り入れた授業構想の工夫 (ICT教育の推進)
- ・「考え、議論する道徳」の授業を通して自分の思いを話す場面をつくることで、個や集団を鍛える。(教育者研究会：モラロジー研究所主催)

○基礎・基本の定着

- ・基礎・基本の定着を図るための朝の活動等の継続的な取組と放課後学習支援
- ・家庭学習の充実(熱心・勤勉・質朴ノートの活用)とその見届け

2 自らかかわり、互いの「よさ」や「違い」を認め合える力を育てる。(徳)

○児童理解と個に応じた支援の充実(「坂部っ子を語る会」等による情報共有)

○「よさ」や「違い」を認め、誰もが生き生きと活躍できる共生社会づくり

- ・特別支援教育の理解と充実
- ・特別支援学級や異学年、福祉施設等との交流を通じた思いやりの心の育成

○自己肯定感を高める活動(みかんの実等を使った「よさ見つけ」の励行)

○社会で生きていくために必要な力を身に付けるキャリア教育の推進(9年間のつながりを意識した榛原中学校区内小中一貫教育の推進)

○坂部しぐさの継承と発展(本物の自慢に)

- ・あいさつしぐさ、きれいな言葉しぐさ、そうじしぐさ、ろうか歩きしぐさ
靴そろえしぐさ、傘とじしぐさ

○教育活動全体を通して道徳性を養う。

○子供の創意を生かし「楽しい学校づくり」「よりよい学校づくり」を目指した児童会活動

3 健康や安全について考え、自らを鍛える力を育てる。(体)

○体づくりに関する指導(体力アップカード等を活用し主体的に取り組む場の設定)

○健康づくりに関する指導(心と体を整える場の設定)

- ・新型コロナウイルス感染防止対策の徹底

○食に関する指導(栄養教諭による食育指導、食事のマナー)

○安全に関する指導(防災・防犯教育、交通安全指導で「自分の身は自分で守る」意識の徹底)

4 学校、家庭、地域が連携し、信頼される学校をつくとともに、ふるさと坂部を愛する心を育てる。(信頼と絆)

○学校運営協議会を機能させたコミュニティ・スクールの推進

- ・家庭・地域と連携した「ふるさと坂部体験」や地域の材を生かした「ふるさと坂部学習」の推進(坂部の魅力発見)

- ・里やまの会、クラブ活動、読み聞かせボランティア、施設等との交流(坂小サポーター)

○教職員自らが、率先垂範を心掛ける。

○家庭やSC、SSW、外部機関等と連携した教育支援

- ・保護者との対話を通じた関係づくり
- ・SCやSSW、専門職員を活用して特別な支援を要する子とその保護者への継続的支援を進める。

- お便りやHP等を活用した情報発信
- 坂部小学校開校 130 周年（歴史と伝統を受け継ぐとともに、未来につなげる）
 - ※「開校 130 周年記念式典」は実施しないが、子供たちには、本校の歴史について語るとともに、節目となる活動を考える。
- 5 笑顔があふれ、磨き合える職員集団をつくる。
 - 語り合い、笑い合える職員室（不祥事根絶に向けた声掛け）
 - 前例にとらわれない充実した教育活動の創造(コロナを通して学んだ経験を踏まえ、積極的に提案し、新たな教育活動を進める)
 - 学校における働き方改革の趣旨を踏まえ、メリハリのある勤務を心がける。(SSSの活用、校務の整理、職員の意識改革、職員間の協働体制、協力体制による負担感の軽減等)